

留学生教育の発展に向けて
—短期留学生を対象とした日本文化論教育の可能性—

Towards a better education of international students
Japanese cultural studies for short-term students: possibilities and necessities

ラインホルト・グリンダ¹

Reinhold J. GRINDA

Abstract

The following paper is going to discuss some possibilities for further development in the education of short-term, non-degree-seeking international students to make their studies at a Japanese university more fruitful. Drawing on the author's five-year teaching experience at Yamagata University, including two years in international students' education, it focuses exclusively on their cultural education, i.e., classes given outside their Japanese language education, with particular reference to those they can participate in without or with little Japanese ability. Such classes are becoming more and more important with the desire to raise the number of international students in Japan. It is most important that such classes concentrate on subjects both interesting for short-term students and important for the understanding of the country, and are accessible for Japanese native speakers as well.

1. はじめに——留学生教育のこと

政府の政策を受けて、大学に対する要求がいつそう強くなってきた。2020年を目途に留学生を30万人に増やすという計画の実現に向けて留学生数を増やす必要とともに、その留学生が日本の大学に来てから、どのような可能性や機会があるかが近年一層盛んに議論されるようになってきている。当然ながら、留学の可能性は言語能力を含む本人の能力による。ただ、留学前に十分な日本語力を持っていない学生には留学の資格がないという考え方は、もはや現実的ではない。それより、日本語力のある学生にもそうでない学生にも、どのようにして同じように充実した留学を可能にするか。この問題の解決が留学生数を効果的に増やすことにつながると思われる。

大学間協定を通じて、定期的に海外の同じ大学から短期留学生を迎えたり、そこへ本学の学生を派遣したりすることが、年々、大学にとって重要になってきている。その際、日本に来る短期留学生としては、日本学を専攻ないし副専攻とする学生だけでは、限度がある。そうであれば、日本語母語話者のために構成された授業を留学生が履修するという態

¹ 山形大学国際センター（2009年10月1日より基盤教育院） 准教授

勢だけでは不十分である。留学生を増やすという目標を掲げた大学にとって大切な存在になるのは、日本で勉強したいが、日本に関する知識も、十分な語学力もまだ持っていない、しかし、それを得たいという意欲を充分持っている学生と、それを支援する海外の大学であろう。

したがって、日本語教育は元より、こうした学生に適した講座、すなわち、日本についての、母語話者と同様の予備知識を前提としない入門者向けの講座を提供することが必要となる。そうした講座を充分備えた大学こそ、海外の学生にとって魅力があるのではなかろうか。

本学では、短期留学生プログラムの一つとして、Japan Studies Program (以下JSP) を設けている。その柱は、日本語教育のほか、「日本文化論」と総称する、英語で行われる講座群である。平成21年度は、次の講座が提供された。

Budo: An Introduction to Japanese Martial Arts
Medical Issues and Life Sciences in Japan
Japanese Popular History: Various Ages in Postwar Film
An Introduction to Japanese Performing Arts
An Introduction to Japan's Economy and Business
An Introduction to Japanese Law (以上前期)
A History of Japanese Buddhism
An Outline History of Modern Japan: From Tokugawa to Meiji
Oceanography in Easy English
Japan Seen in Brief: Short Stories of the Twentieth Century
Literature on Screen: Great Writers as Great Films
Ambivalent Factors in Modern Japanese Literature (以上後期)

JSPで留学する時の学生は、日本語力、専攻等によって、大きく二つに分けられるだろう。

第一のグループは、すでに原籍大学で日本語・日本文化等のコースを履修し、聴解力・読解力とも日本語能力試験等で証明できる程度の力があり、日常会話も可能な者である。日本関連分野を専攻し、留学の動機は日本ならではの勉強や研究である。多くの場合、日常的な日本語以外に多少なりとも専門用語の知識がある。そうした学生にとっても、日本での生活には、まだ様々な支援が必要である。また、限られた留学期間を最も有意義に使うために、相談や指導も欠かせない。非漢字圏の出身者は、この段階では、まだ日本人並みに流暢に話したり聞きとったりできることはまれであり、留学後ただちに一般の授業、とりわけ講義やセミナーに問題なく付いていける者は珍しい。ただ、原籍大学で覚えた知識を持って、日本で追究したい研究などの目的に積極的に向かっている。受入大学はその目的に達する道を開く役割がある、と言えるだろう。

第二のグループは、日本について勉強してはいるものの、まだ初歩的な段階にある者である。第一のグループより数多く、これから更に増えていくと思われる。日本の制度、地理、生活、歴史、文化について、独学以外に、確実に持っている知識もまた、学生個人や原籍大学によってばらつきが大きい。留学期間も概して第一のグループより短く、半年で

あることも少なくない。

そうした二つのグループの学生の留学時の日本語能力を伸ばすため、日本に対する真面目な興味を充たすため、また、大学が単なる日本語学校以上の役割を果たすためには、どんな可能性があるか、以下に、できるだけ具体的に論じてみたい。

本稿は、山形大学国際センター（21年度後期より基盤教育院）で、主に短期留学生のための講座を教え、その講座の枠組みになるJSPの中で「日本文化論」を担当した、平成20年度後期から21年度にかけての一年半の現場経験を元に行っている。短期留学生教育の現状と発展について、筆者の意見と希望と、少なからぬ反省をまとめた報告である。未熟なところも多く、さらなる経験や学内の条件とともに変わる点も少なくないと思われる。また、筆者の意見がやむを得ず強く現れているところもかなりある。いずれにしても、大いに動いている留学生教育で活躍している教員に、僅かでも参考になれば幸いである。

2. 短期留学生を対象とした日本文化論教育の目的と可能性

日本語が充分でない短期留学生に対して、言語能力の穴を埋めることが最も大切なのは、当然のことである。しかし、単なる語学学校でない大学には、言語教育以外に、何らかのプラスアルファとなるべき授業があってよいはずだ。大学には、各分野の専門家がおり、その専門について知りたい人に分りやすく教えることも、教員の仕事の一つである。では、それはどのような形で行えば、短期留学生のためになるだろうか。

その答えは、学生の日本語力によって、次のA、Bのように、やや違ってくる。

A. ある程度の日常会話ができる学生は、分りやすい日本語で行われる講座によって、その力を伸ばすことができる。ここで考えられる講座は、簡単な日本語で行われ、日本語上達にもっと挑戦するきっかけになるとともに、それまで以上に日本について知りたくなり、知らない分野と親しもうとし、自らができる範囲で日本語を使っていこうとする意欲を呼び起こす講座である。それは、日本語力を母語話者向けの授業ほど要求されていないが、充分刺激的な内容を持った授業だ。日本語を使うことだけでなく、日本・日本文化に関する内容が（恐らく余所でそれほど紹介されていない内容も）分りやすく紹介することが、こうした授業のセールス・ポイントになるだろう。古典から現在までの日本文化、地理、歴史などから、そうした内容は限りなく考えられる。そこで、注意すべきこと、純粋に母語話者向けに構成された授業と異なる点がある。まず、もちろん、意識して分りやすく話すことである。次に、教員の講義や文字資料だけでは、興味を呼び起こすには不十分であるため、見せるもの、聴かせるものなどの実物を効果的に使うことである。また、母語話者に比べ、聞いたことを直接参考にする懸念があるので、内容ができるだけ偏らないようにすることである。これらが主な違いと言える。

B. 日本語を初級から勉強しなければならない学生にとって、日本語の上達以外の留学の効果は、少なくとも日本についての視野を広げ、帰国してからもその興味を失うことなく、さらに積極的に学び続けることであろう。言い換えれば、学生本人と大学での勉強、さらに広く、学生の世界観や文化観に変化を与えることだ。言うまでもなく、

このカテゴリーの学生にも、Aの学生に対するのと同じように、短期間の留学を貴重な体験とするに値する重要なテーマについて、まとまった情報を伝えることが欠かせない。Aの、すでに日本語がある程度できる学生に比べ、留学時さほど日本語力のない学生にとっては、帰国してから日本はまた遠い国になり、習い覚えた日本語を使う場面も欧米出身の学生にはアジア出身者より少ないと思われる。そうした条件を考えると、原籍大学での授業以上に、日本について知ろうとするに足る刺激を与えない限り、留学は目的を外れたものになってしまうだろう。

AとBの学生は、日本語の授業は別として、日本文化論の授業では共に学ぶことになる。どちらの学生にも適切な授業とするために大切なのは、次の点である。

- ・理解しやすさ（言語も内容も）。
- ・国に持ち帰れる資料を配付する（学生自身のノートだけに頼らずに済むように）。
- ・個別指導（担当授業のテーマに限らず、関連する日本文化のテーマに関し、和書・洋書を問わず、様々な参考文献を適切に紹介する。）
- ・関心を高める工夫として、実物を取り入れる。もし意義が認められ、時間的にも可能なら、学外へ研修にも出かける。
- ・留学生だけでなく、ともに受講している日本人学生にも興味を持てる内容にする。
- ・その内容をもとに、授業を交流の機会とする。
- ・短い時間を最大限に活かした、内容的に入門レベルの授業にする。
- ・講座の内容は、大多数の短期留学生が関心を持っている人文系（歴史、文化、文学等）のほか、一定の均衡を保つため、社会科学系（地理、経済、法律等）や自然科学系の授業も最小限度含むようにする。
- ・受講者やテーマによって、説明を適宜二ヶ国語にすること（英語の方がよく分る学生と日本語の方がよく分る学生がともに多い授業では有効）。
- ・留学生の出身国により、日本との歴史的・文化的共通点の有無を考慮した上での授業内容にする。
- ・受講者によって、教え方、内容、言語とも最も効果が上がるよう柔軟に変える。
- ・授業は試験や何らかの資格の準備にはならなくとも、その内容は、日本語母語話者も含む受講者全員の日本理解に貢献するものにする。

以上が、教え方の大まかな目安になる。いずれも確実にある程度必要である。日本人学生が参加する意義について、ひとこと述べると、留学生・日本人学生両者に刺激を与え、関心を高めるのに大いに有効であり、今後も進めるべきだと考える。両者の活発な授業参加により授業内容は必ずより豊かになるからである²。

Aが受講する日本文化論の授業には、次の点を採り入れる。

- ・補助的に日本語を使うこと
- ・日本語を活かす機会を増やすため、参加者同士の意見交換の際、学生に自分の国のことなど、本人ならではの内容について、日本語でも話すことを勧めること

² 平成22年度から、「日本文化論」科目も、日本語教育と同じく、留学生だけを対象として再編される見込みである。

- ・日本語母語話者と関連情報を交換すること

Bにとって大切なのは、次の点である。

- ・英語で行える勉強法を指導する。(英語の、どの参考書・教科書を使えばいいか、詳しく教えること)
- ・授業の基本部分を、(当分)日本語よりよく分る英語で教える。

言うまでもなく、日本文化論の授業には、母語が日本語でも英語でもない学生が多い。外国語を使うことこそ、受講者のチャレンジだ。また、英語を使うことは、日本人学生にも同じ程度のチャレンジになり得る。短期留学生を日本人学生と分けて教えれば、交流の刺激がまったく失われてしまう。日本人学生にとっても、それが世界観の形成に影響し、勉強への熱も大いに刺激されることが期待できるようになっている。

短期留学生にとって効果的なものにするために、授業の形態としては、やはり演習やセミナーのような形の方が、ただ話を聞いてノートを取るだけの講義よりふさわしい。その方が柔軟性も、積極的な参加も、覚えた内容と得た日本語力を活かす機会も、はるかに多いからである。

3. 具体的な授業の例

2で概略を述べた、日本語母語話者にも短期留学生にもよい授業、よくない授業とは何か、もっと具体的にするため、いくつかの例を挙げたい。ここでは筆者が過去一年半に、JSP日本文化論のために担当した授業を取り上げる。

これまでに担当した日本文化論の授業は、文学と映画を中心とした次の五つである。

A Japan Seen in Brief: Japanese Short Stories of the Twentieth Century. (二十世紀前半の短編小説、参加者：日本人38人、留学生9人)

B An Introduction to Japanese Performing Arts. (日本伝統芸能入門、神楽から戦前のはやり歌まで、参加者：日本人27人、留学生10人)

C Showa Japan: Life and Films. (映画で観る昭和の日本、参加者：日本人8人、留学生10人)

D Japanese Popular History: Various Ages in Postwar Film. (大衆日本史—戦後映画に見る歴史、参加者：日本人8人、留学生10人)

E Literature on Screen: Great Writers as Great Films. (映画に見る日本文学、参加者：日本人40人、留学生13人) というテーマである。

22年度には、CのShowa Japanを戦前と戦後の二つの時期に分けて、映画に合わせてその時代を描いた小説も読む講座と、新しいテーマとして、

F Japanese Popular Heroes. (大衆的英雄、戦国時代から江戸末期まで) を企画している。

使用言語は主に英語だが、受講者に日本語母語話者が多い場合、随時日本語のまとめも挟んでいる。形態はすべてセミナーに近い。進め方は、次のようである。まず、ある程度の説明をしてから、英語字幕のついた映画を観せるか、以前から渡しておき、宿題にしておいた小説について議論して、受講者の質問に答えながら、背景など時代に関する内容を

よりよく理解してもらおう。小説を題材とするAの授業の大半は元よりコメントや質問とその答えだが、C～Eでは映画を観る前に、原作、時代背景などに関する解説を行い、観た後で質疑応答をしている。

映画・小説ともに、字幕版や翻訳さえあれば、作品を選択する際の最も大事な点は、ある時代が様々な側面ではっきり描いてあって、読んだり観たりすると、その時代をある程度捕まえられるものかどうかということである。

Aの小説の授業の場合には、田山花袋の「一兵卒」が日露戦争の歩兵を描き、原民喜の「夏の花」が原爆直後のときを描いたように、ある重要な時点を直接記録風に描くものもあれば、久米正雄の「虎」における新劇俳優、徳田秋声の「勲章」に出てくる昭和初期の下層階級の夫婦、林芙美子の「下町（ダウントウン）」や「骨」、永井荷風の「買出し」に登場する敗戦直後の東京に暮らそうとする女たち、平林たい子の「人の命」のヤクザなどのように、時代の場面（東京の山の手や下町、戦時中の刑務所など）とともに、その時々典型的な人物を描くものもある。また、森鷗外の「普請中」や井伏鱒二の「乗合自動車」のように時代から距離を保った、風刺めかした立場から描く小説も読んでもらう。これらを使って、一般的な説明の後で、早速その小説とそこに描かれた時代の具体的な内容に入るという手順である。

映画を観せる前に、原作と作者や題材の歴史的な面、その特質や、映画の中のどこで歴史的側面を自由に扱うかを、できるだけ短く述べて、もし歴史的な人物が出ていれば、その時代の社会や日本史上どんな位置を占めたかを理解してもらおう。時代劇は元より、明治もの、大正ものなど、過去の時代を描こうとする映画は、原作の小説よりその時代のことをはっきりと分りやすく描くのが日本映画の特徴であり、その点で日本映画は西欧の映画とはやや異なるとも言える。その点からも、日本の映画は、若い留学生に日本の歴史を紹介するのに大いに役立つのである。上記のC、D、E、Fの各授業もまた、言うまでもなく、映画を楽しむだけでなく、日本の歴史を少しずつ理解してもらおうことを狙いとしている。

小説講読Aの場合、原文より翻訳を読む留学生も多くいるが、文学としての特徴よりも、その時代を描いていることを基準に小説を選んでいるから、翻訳に不満がある時にも問題が大きくなる。純粋な文学としての講読にすると、内容が専門的になり過ぎ、しかも面白さが薄れるだろう。翻訳しか読めない受講者もいる場合、そうした授業は余り意味がないというのは、筆者だけの意見であろうか。また、Aでも映画化された文学の授業Eでも、日本の文学史についても教えるところが多い。映画化された文学の場合、近松の「冥途の飛脚」、南北の「東海道四谷怪談」という古典歌舞伎から始める。「雁」という非常に映画になりにくい原作で、明治の東京やその時代の女性の生活について、戦後の立場から様々なことを描いた映画をもって明治の文学に触れる。「大菩薩峠」、「関の弥太っぺ」、「黒蜥蜴」で戦前の人気文学、時代小説や探偵ものの、それぞれの特徴を見せる。井伏鱒二の「簪」で第二次大戦直前の日本を描いた典型的な現代小説をその同時代の映画でも見せる。外国文学の日本時代劇化である「或る剣豪の生涯」や、川端康成の脚本である「狂った一頁」も、近現代の文学や文化に触れて、それについて面白く勉強する機会を増やすき

かけとなる。江戸から戦後までにどう進んだか、劇文学・大衆文学などはどんなものだったかについて具体的に知ってもらう目的で、様々な時代の主だった例を用いている。

小説購読（A）と映画に見る日本文学（E）の反省点は、第一に、読んだ小説、観た映画の印象がバラバラになって、学期の終わりに、日本の歴史や文学史について統一された印象にならない時もあることだ。第二は、説明は最も大切なところを中心とするべきだが、そうではなく本筋から逸れてしまった時も多かったことだ。それはどちらも教員としての弱点によるもので、授業の企画そのものが原因だとは考えていない。

大衆日本史（D）と大衆的英雄（F）の授業では、小説より映画を多く使っている。日本武尊の伝説から入り、戦国武将、そして江戸末期の英雄たちへと進める。授業のポイントは、戦国時代が終わった後の江戸時代が近代に近づくにつれて、英雄のイメージが戦国武将や江戸初期の将軍など政治の中心に位置した人物から、次第に、忠臣蔵のように幕府から切腹を命じられる浪士へ、そして混沌とした江戸末期になると国定忠治、清水の次郎長のように、侠客ではあるが、博徒であり、犯罪を犯す人物へと移っていくことにある。織田信長、徳川家康のように全国を掌握した人物から新撰組の中心人物のように不安定な時代を代表する人々、国定忠治、清水の次郎長のようなアウトローまで、大衆の注目する英雄像が変化していったことが、変る時代についても大いに勉強になり、同時に国民の嗜好についても窺えるところが多いと思われる。

教材としては、いくつかのテーマについて同じものが役立つことがある。日本の歴史小説の映画化作品がその一つの例である。戦国武将のこと、その時代の最も重要な人物の、助け合いと競争のバランスがどんなにデリケートなものだったか、最も分りやすく描いた映画が伊東大輔監督の「反逆児」だ。その時代状況を描くと同時に、どの戦国時代の英雄よりも古今を通じて人気のある織田信長の面白い描写もあり、また、原作者大仏次郎独特の歴史小説の特質も忠実に伝える、文学映画化作品の秀作である。なお同じ監督の「大江戸五人男」は、将軍直属の武士と江戸町人の難しい関係、いわゆる旗本奴と町人奴の対立を描いていて、どうして江戸時代武士から侠客、アウトローにまで人気が移っていったか、最も分りやすく描いた映画だ。しかし、その映画の字幕版がないため授業で使うことができない。選択できる教材がどれほど限られているかを示す一例として、ここに記しておく³。

週1コマ15週という枠の中では日本史を通史的に紹介する余裕がなく、一部の時代について、一部のことを紹介するだけの内容になる。しかし、これらの授業を受講して、日本史についてもっと広く知りたいと思う学生も、ともかく日本史に親しむようになり、その理解力も育ってくるのではないだろうか。

上記のA～Fは、留学生が原籍大学で得られないような情報や、使われていないであろう教材を活用して、できるだけ広く深く永く日本に対する興味を喚起する授業として構成している。日本ですでに人気と評判を得た小説や映画を教材にして、昔の日本にも、これらの小説や映画を生みだした戦後から現代までの日本にも同時に近づくことが狙いである。

³ 本稿を書いた直後、「大江戸五人男」の英語字幕版が作られたということを知った。他にも歴史を知る役に立ちそうな古い映画が徐々に字幕で観られるようになってきているが、江戸以降の、第二次世界大戦以外の背景を描いた、「殺陣師段平」や「太平洋ひとりぼっち」のような映画の字幕版は依然として少ない。

最後にBの伝統芸能入門について述べたい。C～Eにおける説明・鑑賞・質疑応答の手順と違っているのは、事前に小説を、一回の授業につき一篇程度、読んでもらう短編小説の授業Aと、伝統芸能入門の授業Bである。特にBは、質問の時間をさらに長くするとはいえ、講義に近い形態になり、見せるもの、聴かせるものは、説明した芸能の例でしか使わない。舞台芸能の場合、やはり説明が詳細にならざるを得ず、配布資料も他の授業より多い。なお、個別の芸能については、百科事典、インターネット、英語の関係図書等にくらでも英語の説明があるが、日本の芸能史を英語で一冊の本や記事にまとめて説明したものは存在していないようだ。その意味で、Bは上記の中で最も野心的な授業・テーマであると言える。

4. 授業の留意点（避けるべき事柄）

3で挙げたテーマは、範囲が広過ぎたC以外は、とりわけ短期留学生の教育にふさわしいと思われるテーマである。一方で、上記の授業でも度々陥った落とし穴がないわけではない。本節では、その問題点とともに、留学生対象の授業の危険性や、しない方がいいこともいくつか挙げておきたい。

(1) 内容が一つの講座に多すぎる

一学期の長さは限られており、その回数内でできない内容は最初から盛り込まない方がよい。受講者は自ら授業を選んでおり、基本的にその内容に興味があるわけだ。しかし、説明が速すぎたり短すぎたり、質問の時間が設けられていなかったりするなど、ペース配分に欠点があると、興味がなくなり、帰国後そのテーマにもはや触れたくなくなってしまう恐れがある。例えばC（映画で観る昭和の日本）の授業では、戦前の内容が多く、必要な説明もどうしても長くなりがちだったため、戦後が全体のわずか三分の一になってしまった。戦後についても十分に余裕を持って採り上げられるよう、22年度は二つの独立した授業にする予定である。

(2) 資料が長すぎたり分りにくかったりすること

配付資料では、主なポイントに限って説明し、関係専門用語もその説明の中に入れなければならない。一定以上の詳しい情報は（たまたまそのとき他の授業や試験に集中しなければならない）受講者にとって不必要であり、面白くもない。例えばBの伝統芸能の場合、それぞれの芸能の由来と互いの関係をうまくまとめればよく、それ以上は必要ない。

(3) 企画不足のため、大切な内容を削ってしまうこと

一学期15回、受講者の興味を保つことが大切である。しかし、全体の時間を見渡し、後に出てくる大事な内容を充分説明する時間がなくならないようにすることも、やはり必要だ。例えばDやFのようなテーマの場合、戦国時代の複雑な状況と、それぞれの武将を丁寧に紹介するのはいいが、幕末の、さらに複雑な状況を同じように分りやすく説明する余裕が学期末にもはや残っていないのでは困る。

(4) 留学生だけに分るやり方

本学には、アジア系でない留学生は比較的少ない。JSPは、その数を増やすため

に作られた短期留学プログラムであるが、教養教育の授業として、日本人学生も履修できる。日本のことについて違う視点からの説明を聞き、英語力を鍛え、留学生と触れ合うためだろうが、かなりの数の日本人学生がJSPの日本文化論を受講している。こうした学生を授業にうまく参加させるには、授業で使う英語が難しすぎないようにし、話をよくまとめ、英語で質問するため頑張る学生に必要な時間を与えることも大切だ。留学生のためにも必ず、日本人学生とともに勉強できる授業の方が役立つ。そこでは教員の態度も非常に大切になる。特に学部生に対してもヨーロッパ並みに大人扱いをすることを忘れてはならない。

5. 多文化交流「ヨーロッパと日本」

ここで、JSP日本文化論とは別の留学生向けの授業、「多文化交流」にも触れておきたい。日本文化論は主に欧米の学生と日本語母語話者のための講座だ。それに対して、比較的日本語力の高い留学生と日本人学生を対象とした多文化交流の授業には、アジア出身の短期留学生の受講者が多い⁴。多文化交流の使用言語は、説明も教材も、すべて日本語である。筆者が21年度担当したのは、「ヨーロッパと日本」をテーマにした授業だが、受講者の発言のための時間も、日本文化論のどの授業よりも多くしている。自分の国と日本を比較して、様々なテーマについて、受講者同士が互いの意見や情報を聞き、質問したり答えたりする、小さな発表も毎回ある。教員も、自分の国のこと、知る限りのヨーロッパのことも採り上げて比較し、質疑応答の両方に参加している。

21年度の授業は、韓国と中国のほか、モンゴル、マレーシア、ラトヴィアからの留学生が受講していて、教員である筆者はドイツ人である。半分以上の受講者が日本人の学生なので、それぞれの国の留学生を中心にグループに分けて、グループごとに自分たちの好きな国と日本を比べる。初回に聞きたいテーマを書いてもらい、あとは毎回、その二つか三つについて話し合ったり調べたりし、順に発表するというふうに進める。学期の中ほどで、三回にわたって、現在のドイツの生活がよく分る、互いに対照的な映画を二本使って、ヨーロッパのことをグループで選んだ国々と比較してもらった。

アジアの留学生、欧米の留学生が互いに交流を深めるだけではなく、互いに知らない国々のことを覚えられることが、多文化交流授業の主な意義である。日本文化論と同じようにこの授業も、留学生だけ、あるいは日本人学生だけの授業としては、考えられない、というより、そうなれば存在意義が失われてしまうだろう。日本語で行われている授業だから、英語で行われる日本文化論は敷居が高いが留学生と一緒に勉強したいと思う日本人学生も受講しやすい。内容が日本の紹介だけではない点も日本文化論と異なる。

6. 評価の特質：レポートではなく発表

3と5で採り上げた講座は、一般の科目とやや違うため、評価の方法もまた違う。すべ

⁴ 「多文化交流」の成り立ちは、平成17年度以前の「日本事情」という、留学生だけを対象とした科目を、18年度から日本人学生とともに学ぶ形態に変えたものである。

ての講座に共通する一つの利点は本学の学生が留学生とともに勉強できることだが、日本人学生と留学生を別々にさせないために、協働して行う課題を多くすることが効果的である。レポートを求める代わりに共同発表を評価の対象とすれば、クラスの雰囲気も打ち解けやすくなる。何人かのグループで資料を載せたレジюмеを作り、発表を行う。そのレジюмеは朗読する原稿ではなく、プレゼンテーションを分かりやすいものにするデータを含み、読みやすい長さ（1ページから4ページ）にする。発表はグループで準備する場合が最も多いが、その場合、グループ全員を同じ成績とする。講座のカバーする範囲から、自分たちで興味を持っているテーマを自由に選んでもらう。条件は、以前から興味を持っているテーマだから、多人数のクラスメートたちの前で話すことも苦にならない。この方法は、筆者が17年度から教えた教養セミナーや人文学部で教えたドイツ語講読などでも用いた。ただ、日本文化論の場合、発表は口頭の部分も資料もすべて英語であり、日本文化論・多文化交流とも、留学生と日本人学生が協働で発表する点が異なる。ひとりでレポートを書くよりも、人前で発表し、（日本文化論では）そのために英語を使うことも、外国人と協働作業をすることも、社会人となってから一層必要な、様々な時に求められる能力になるだろう。

こうして明確になるのは、留学生が日本人学生と一緒に、日本についても、（多文化交流では）他の国についても、ストレスの少ない雰囲気、かつ本気で勉強できることが、留学生教育の大切な一部分であることだ。もし、留学生だけの教育にとどまれば、同時に受講者数はごく少数になる。それだけではなく、その少数の留学生は日本人と一緒に勉強することができなくなり、日本についてすでに勉強したことを活かし、増やす機会を奪われてしまう。知識を得ることだけが留学の目的ではない。彼らにとっても、せっかく日本まで来ていながら、常に日本人学生と別々に教育を受けるのでは、必ずしも最も充実した留学にはならないのではなかろうか。

なお、受講者数については、人数が多すぎると授業への集中度が低くなる恐れもある。また、留学生と日本人に同時に教える際、学期初めに集まった学生全員の期待に応えられないことも残念ながら多い。英語が難しい、ペースが速すぎるか遅すぎる、説明の仕方が自分の関心に合わない等の理由で、履修登録が変更できる学期初めの数週間内に受講を止める学生が少なくない。結局、受講者数をあらかじめ制限せず、受講したい学生を前もって断らないことが、これまでの授業形態では最も現実的だ。一ヶ月以上続けるのは、授業が気に入った学生だけだから、その一ヶ月が経つと、自然にちょうどよい人数になることは、毎回同じだった。

7. 今後の課題と期待

課題と言えることは、二つある。有意義だと分り、自分の授業に採り入れたい内容と、望ましいが、まだ提供されていない講座である。ここでは後者を中心に述べたい。

山形大学に最も多くいるはずの、アジア諸国出身の短期留学生のため、日本語母語話者向け以外の、日本語で行われる講座があればよいと思われる。高い日本語力を持っている留学生にも、日本の学校教育で日本人学生が受けたのに等しい日本に関する知識はないは

ずだ。また、出身国によっては、英語もさほど流暢ではないから、JSP日本文化論のように英語で行われる日本学入門講座も受講が難しい。地理的・歴史的・文化的に近く、日本に関する情報を、欧米の学生より持っている者も多いため、そうした留学生を対象とする講座内容は日本文化論よりやや進んだものにすることができよう。教材選択もまた、日本語の原文や字幕のない映画も使えるので、母語話者向けの専門の授業ほどではないにせよ、日本文化論よりはるかに自由になる。現在のところ、アジア出身の短期留学生のための、日本語による、日本文化論に相当する講座はない。最近日本の行政などにより、アジアとの交流が大事にされてきて、アジア系の留学生も非常に多くいることを考えると、こうした講座を設ける価値があるのではないだろうか。

こうして短期留学生を受け入れる意義は、単に海外の協定校の学生に勉学の機会を提供するだけではない。日本人学生が留学生と触れ合うだけでなく、ともに学び、協力して作業をする機会を増やせば、留学に興味を持つきっかけとなる。そして、実際に留学に行く機会があれば、本学と協定校の交流を促進し、学生にとっては人生に大きな影響を与える貴重な経験となるに違いない。